「国語教育研究」第六十号（平成三十一年三月刊）

兵庫県立歴史博物館本「源平合戦図屏風（一の谷合戦図）」の〈絵語り〉に関する覚書（一）

――老翁との対面場面から坂落の場面まで――

井上　泰

一　はじめに――問題の所在

平家の盛衰を諸行無常という仏教言説の枠の中で語りつつも、争乱の中で命を落としたり、葛藤し、苦しみを抱いて生きていったりした者たちの〝生〟を語り出そうとする『平家物語』は、日本中世、近世において絵画化されていった。[*1]

その中で、いわゆる〈一の谷合戦〉を大きく描いた屏風絵がある。〝一の谷合戦図屏風〟である。現存最古のものは、室町時代末と推察されている智積院蔵「一の谷合戦図屏風」である。また、それ以降は現存するものも多く、かねてから川本桂子氏や田沢裕賀氏によって、モティーフや描かれ方による分類が行われてきた。[*2]また、近年、〝一の谷合戦図屏風〟はその「ヴァリエーション」の多さが指摘され、「近世期の名所絵的な表現」や「近世期制作のテキスト（古浄瑠璃「源平兵揃」など）と対応させて見ていく必要」性が指摘されるようになった。[*3]『平家物語』との対応関係だけでなく、絵画制作主体の当時の文化事象との対話による表現、つまり、絵画制作主体の［解釈―表現］行為過程＝〈絵語り〉が分析されるようになってきたと言えるだろう。

さて、兵庫県立歴史博物館には、〈一の谷合戦〉を描いた「源平合戦図屏風（一の谷合戦図）」と呼ばれている屏風絵が所蔵されている。成立は、「近世前期、十七世紀代」、制作者は、狩野派の絵師と考えられている。[*4]

本屏風絵について、前田徹氏は次のように述べている。[*5]

この屏風では、生田の森の戦場を通例よりも一扇分広くとって大軍勢の乱戦場面を詳細かつ躍動的に描ききるとともに、『平家物語』が描くさまざまなこの合戦の逸話の中から、卑怯未練や悲哀を連想させる場面がかなりの程度排除されていることを指摘した。ほかの屏風諸本では相対的により『平家物語』に沿う形で多様な逸話がちりばめられており、この屏風はやや武勇を偏愛するともいうべき特徴を示している。また、今日的な感

覚では執拗さすら感じさせるほどに、血なまぐさい凄惨な描写が繰り返し描かれており、戦場の現実的な姿をも示していることも指摘した。この屏風は、躍動的な乱戦場面とともに、戦場で必然的に発生したであろう凄惨な光景をも丹念に描き出すことによって、『平家物語』由来の逸話を重視するほかの一の谷合戦図屏風諸本に比べるとやや特徴的な形で、戦場の「光」と「影」を表現していると考えられるのである。

よく知られているように、この屏風が制作された十七世紀は、戦国の遺風として武勇を尊重する意識を残しながら、次第に泰平の世の文化へと移り変わっていく時期であった。この点を踏まえれば、この屏風が示す武勇の賛美や戦場の凄惨な光景の描写からは、こうした現実には合戦が発生しなくなった時代の中で、戦場に臨む武士の心構えや、戦場の現実的なありさまを視覚的に伝えようといった制作意図がうかがえるのではないか。この屏風には、現実的には戦がなくなった時代における、武家の戦場教育の教材とも言うべき性格がうかがえるのである。

本屏風絵は、他の屏風絵と比べて、詳細かつ躍動的に生田の森の乱戦場面を描ききるとともに、そこに凄惨な戦闘場面（「影」）を描き加え、また、『平家物語』から武勇を語る逸話（「光」）を選んで描くことによって、「現実には合戦が発生しなくなった時代の中で、戦場に臨む武士の心構えや、戦場の現実的なありさまを視覚的に伝えようといった制作意図」をもつものとして解釈されている。確かに、場面選択の趣向には特徴があり、また凄惨な戦闘場面を描き加えている。しかし、本屏風絵で語られていることは、「戦場の『光』と『影』」だけであろうか。例えば、物語場面そのものの語り方や画面を分けている霞、または、物語場面の場そのものの山の稜線や巌の線の語りを読み解くことで、別の文脈が見えてこないだろうか。本稿では、前田氏の詳細な検討を参考にしつつ、さらに絵相に検討を加えることで、本屏風絵の〝語り〟について分析をしていきたい。

その検討に入る前に、改めて、覚一本『平家物語』で〈一の谷合戦〉が、どのような出来事と順序をもって語られているのかを確認しておく。

■覚一本『平家物語』巻第九

老馬—①能登殿、山の手を守る。

②道盛、北の方との最後の名残を惜しむ。

③九郎御曹司（義経）、一万余騎を二手に分け、一方は一の谷の西の手に遣わし、自身は鵯越に向かう。

④別府小太郎の進言により老馬の手綱を放ち山の案内者とする。

⑤武蔵坊弁慶、山の案内者として、老翁を連れて来る。老翁の息子が案内者となり、御曹司から鷲尾三郎義久と名を与えられる。

一二之懸—搦手の熊谷と平山の先陣争い。

二度之懸—①大手、生田の森にて、河原太郎・次郎兄弟、先陣をし、二人とも命を落とす。

②梶原、河原兄弟を討たせたことを不覚に思い、五百

余騎で平家の城に討ち入る。
③梶原平三、一旦引き上げた後、息子の梶原源太が取り残されていることに気づき、再び攻め入る。
④梶原平三、源太が敵に取り囲まれているところを見つけ加勢し、敵を討ち取る。

坂落―①生田の森で両軍合戦を始める。
②鵯越にて、御曹司軍に鹿が驚き、平家の城郭に落ちる。落ちた鹿を、武知清教射る。
③御曹司、鵯越より馬を落とし、落とす道を確かめる。
④一斉に鵯越より落ちるも大盤石の上に降り立ち、落とすのを躊躇する。
⑤佐原十郎義連進み出て真っ先に駆け下りる。
⑥平家の城内に落ち入った源氏は、火を放つ。
⑦平家の人々、我先にと逃げ惑う。
⑧能登殿、真っ先に八島に渡る。

越中前司最期―越中前司盛俊、猪俣小平六則綱に討たれる。
忠教最期―薩摩守忠教、岡辺六野太忠純に討たれる。忠純、箙より「旅宿花」題の和歌一首を見つける。
重衡生捕―本三位中将重衡、庄の四郎高家に生け捕りにされる。後藤兵衛盛長、重衡を置き去りにして逃げる。
敦盛最期―敦盛、熊谷次郎直実に討たれる。
知章最期―①蔵人大夫成盛、土屋五郎重行に討たれる。
②皇后宮亮経正、河越小太郎重房に討たれる。
③若狭守経俊、淡路守清房、尾張守清定一所で討たれる。
④新中納言知盛、息子の武蔵守知章、侍の監物太郎が敵と討ち組む間に海上に逃げる。新中納言の乗っていた馬を河越小太郎重房が取って院に献上し、井上黒と名付けられる。

落足―①備中守師盛、本田次郎に海から引き上げられ討たれる。
②道盛、木村三郎成綱等に討たれる。
③合戦後の戦場の描写及び討たれた兵の名前の列挙。
④主上をはじめとして海上に逃げた平家の様子。

以上が語られている出来事と順序である。このように覚一本は、一の谷合戦において、ある一つの場で生起した出来事だけを語るのではなく、大手と搦手、鵯越と平家の城郭、そして浜戦など、それぞれの場で生起した出来事の一つ一つを、時には同時多発的に生起したであろう出来事の一つ一つを語り出そうとしている。では、本屏風絵は〈一の谷合戦〉をどのように語り出そうとしているだろうか。

二　〝霞〟による画面の分節化と場面分け

かつて太田昌子氏は、「絵の読み方」をテーマとした座談会の中で、鎌倉時代後期制作の「法華経曼荼羅」、縦二メートル弱、横一メートル強という巨大掛幅を題材として、大画面の絵画では、山や岩、霞や木、家や棟、そして部屋によって場面が分けられ、同時代の人々

は、それらのものによる場面作りや分節化が誰にでも読み取れたとしている。[*6]

本屏風絵においては、金泥で描かれた霞がそれにあたるだろう。

霞によって画面は、①右上部から中央上部、②中央部から右下部、③左上部から左下部の三つに大きくは分けられる（上図参照）。詳細は後述するが、①は主に坂落、②は平家の城郭と生田の森の合戦、③は主に坂落後の浜戦の事が描かれている。

ただし、この三つの分け方は、大雑把なもので、例えば、③には、坂落前の熊谷・平山の一二之懸が描かれている。また、①と②は、霞が途切れ、平家の城郭の上でつながっている箇所がある。霞によって〈一の谷合戦〉の個々のエピソード（場面）を収めようとするも、収まりきらない点や場面が繋がれている点があることには注意が必要だろう。しかし、ひとまずは霞によって上述のように画面を三つに分け、それぞれについて検討を加えていく。

三　覚一本『平家物語』との違い

それでは、画面①について検討していく。第一扇と第二扇の上部には、馬に乗り一行の先頭を行く義経と、ひざまずき弓を左下に置いて義経を見上げる老翁、そして、その老翁の後ろに弁慶が描かれている[*7]（下図参照）。本場面は、義経が猟師の老翁に道を問う場面を描いたものだろう。

▼覚一本『平家物語』

武蔵坊弁慶、老翁を一人具して参りたり。御曹司、「あれはなにものぞ」と問たまへば、「此山の猟師で候」と申す。「さては案内は知ッたるらん。ありのまゝに申せ」とこそのたまひけれ。「争か存知仕らで候べき」。「これより平家の城廓一谷へ落さんと

思ふはいかに」。「ゆめ〳〵叶ひ候まじ。卅丈の谷、十五丈の岩さきなンど申所は、人のかよふべき様候はず。まして御馬なンどは思ひもより候はず。其うへ、城のうちには落しあなをも掘り、ひしをもうゑて待まゐらせ候らん」と申。「さてさ様の所は鹿かよふか」。「鹿はかよひ候。世間だにもあたゝかになり候へば、草のふかいに臥さうどて、播磨の鹿は丹波へ越え、世間だにさむなり候へば、雪のあさりにはまんとて、丹波の鹿は播磨の印南野へかよひ候」と申。御曹司、「さては馬場ござんなれ。鹿のかよはう所を、馬のかよはぬやうやはある。やがてなんぢ案内つかまつれ」とぞのたまひける。「此身はとし老てかなふまじい」よしを申す。（以下、「鷲尾三郎義久」との対面は割愛。また、本文傍線は引用者。以下本文の引用において同様。）

このように本屏風絵は、義経一行と老翁との対面場面を描いている。しかし、本屏風絵は『平家物語』を忠実に描いていない。「武蔵坊弁慶、老翁を一人具して参りたり。」の直前は、別府小太郎の進言によって老馬を先頭にして山路を行くも、日暮れになったので陣をとる義経一行が語られている。

▼覚一本『平家物語』

白葦毛なる老馬に、かゞみ鞍おき、しろぐつわあげ、手綱むすンでうちかけ、さきに追ッたてて、いまだ知らぬ深山へこそ入り給へ。（中略―引用者）松の雪だに消やらで、苔のほそ道かすかなり。嵐にたぐふをり〳〵は、梅花とも又うたがはるれ。東西に鞭をあげ、駒をはやめてゆく程に、山路に日暮れぬれば、みなおりゐて陣をとる。

そして、陣をとったところに、先に引用したように武蔵坊弁慶が老翁を連れて来るのである。しかし、本屏風絵は陣をとる義経一行を描くのではなく、〝黒駒に乗っている〟義経を描いている。では、どうしてこのような絵相になっているのだろうか。

四　義経の語られ方（一）―〝黒駒〟による語り

義経と黒駒との関係を探っていくと、坂落の場面で義経が「大夫黒」という黒駒に乗っていたと語るテキストに行き着く。覚一本『平家物語』では、巻九の一の谷合戦の場面で、義経が黒駒に乗っていたことは語られないものの、後に八島にて討ち死にした嗣信を語る場面で、義経が坂落の際に「大夫黒」という黒駒に乗っていたことが語られる。

▼覚一本『平家物語』巻第十一「嗣信最期」

（引用者註、佐藤三郎兵衛嗣信が）ただよわりによわりにければ、判官涙をはらはらとながし、「此辺にたッとき僧やある」とてたづねいだし、「手負のだいまおちいるに、一日経書いてとぶらへ」とて、黒き馬のふとうたくましいに、黄覆輪の鞍おいて、かの僧にたびにけり。判官五位尉になられし時、五位になして大夫黒とよばれし馬なり。一の谷の鵯越をもこの馬にてぞ

おとされたりける。

さらに、『源平盛衰記』[*8]では、『平家物語』では語られていない義経の坂落直前での「大夫黒」への乗り換えが語られている。

▼『源平盛衰記』巻第三七「義経鵯越を落す並畠山馬を荷ふ事附馬の因縁の事」

時既によくなりたり。大手に力を合せんとて見下せば、実に上七八段は小石交りの白砂なり。馬の足とどまるべき様なし。歩にても、馬にても、落すべき所に非ず。さればとて、さてあるべき事ならねば、只今まで乗たりける大鹿毛には、佐藤三郎兵衛を乗せ、我身は大夫と云馬に乗り替へて、谷へ打向け給ひ、「鹿の通ひ路は馬の馬場ぞ。各々落せ。落せ」と勧め給ふ。

このように『平家物語』や『源平盛衰記』など〈一の谷の合戦〉を語るテキストにおいて、黒駒は義経が坂落をした際に乗っていた馬として語られている。特に『源平盛衰記』では、『平家物語』では語られていない坂落直前での大夫黒への乗り換えが語られ、『平家物語』よりも坂落の場における義経と大夫黒との結びつきが強くなっていることがうかがえる。[*9]

管見の限りでは、文字テキストにおいて、坂落以前に義経が「大夫黒」に乗り換えたというものは見当たらないが、本屏風絵が制作された当時、義経と大夫黒（黒駒）とが、坂落という場において、強固に結びつき、観念化されていたために、坂落以前の本場面においても、黒駒に乗った義経が描かれたのではないだろうか。[*10]

このように考えると、黒駒（大夫黒）に義経が騎乗した姿は坂落に向かう本場面には相応しく、そして、当時の鑑賞者はその姿から坂落という今後の場面をも想起することができただろう。つまり、黒駒に騎乗した義経の姿は、老翁との対面という物語の一場面を語り出しているだけでなく、今後に展開される坂落という場面をも想起させるものとしてあるのである。

五　義経の語られ方（二）―〝騎乗〟による語り

さて、上述のように義経が黒駒に乗っている絵相の背景には、義経と大夫黒との結びつき、つまり義経の観念化が関わっていると推察される。しかし、義経が大夫黒と結びついているとはいえ、必ず騎乗している必要はないだろう。他絵画テキストには、例えば、次の二つなどには、義経が陣をとって老翁及び鷲尾三郎義久と対面する場面が描かれているが、その側には義経が乗ってきた馬の手綱を持って控える家来が描かれている。[*11]

・東京富士美術館本「源平合戦図屏風」（海北友雪筆）
・神戸市立博物館本「一の谷・屋島合戦図屏風」（狩野吉信筆、十七世紀）

では、騎乗の姿は、どのようなことを語り出しているのだろうか。実は、第一扇の上部には、義経の後続が描かれている（左図参照）。小高い山によって義経とは途切れるものの、山の間からは士卒達が連なっていることがうかがえる。つまり、本屏風絵は、小高い山で

義経と後続とを区切り老翁との対面の場を創出しつつも、一方で山の間から士卒達を見せることで、義経に後続がいたことも伝えている。では、そうした絵相が何を語り出しているかというと、それは、義経が馬に乗り大将として先頭に立って士卒達を率いてきたということではないだろうか。そのような義経を語ったものに、『源平盛衰記』がある。『源平盛衰記』では、鵯越に向かい始めた直後に、鵯越の長く険しい山道を馬に乗って歩みを進めつつ、士卒を叱咤する義経の姿が語られる。

▼『源平盛衰記』巻第三六「清章鹿を射る並義経鵯越に赴く事」

太夫といふ黒馬には、白覆輪の鞍置て、労りて引かせらる。この黒は今度の上洛に鎌倉殿より得給へり。本の名をば薄墨とぞ申ける。かの山道は、長山遥かに連きて人跡殆ど絶えたり。鵯越とてゆゆしき嶮難の石巌なり。自ら鹿ばかりこそ通りけるに、軍将前に進んで宣ひけるは、「義経が乗りたる大鹿毛は、陸奥国にて名を得たる気高き逸物なり。敵にあはん時は、必ずこの馬に乗るべしとて、平泉を立ちし時、秀衡が我に得させたりき。鎌倉殿の賜びたる薄墨にも、底はまさりてこそあるらめ。されば宇治川を渡りし時も、この二匹の馬共は鞍づめより上を濡さざる逸物なり。さても我が朝の名馬には、三日月・和琴・鳥形・浦々・荒磯・望月・宮木・大耳子・小耳子・夏引・小花なんどなり。或は長七寸にあまり、或は八寸なんどあけりといふ。満政が赤六、貞任が大黒にも劣るべしとも覚えず。音に聞ゆる鵯越の巌石、この馬の翔らざるべき所にしもあらじ。卯刻の矢合せ、急げや、急げや。夜半に」とて、伏木・磯道をも嫌はず、木透を守つて、引懸け、引懸け、さしくつろげて打ち給へば、我も我もと続きたり。

『源平盛衰記』の場面を描いているというわけではないが、義経が騎乗し、そして小高い山の間から後ろに士卒達が続く絵相からは、老翁と対面するまでの、義経が騎乗し、山道を先頭に立って士卒を引き連れて登ってきたという、本場面以前の物語を想起することができるだろう。[*12] 義経の騎乗している姿とその後ろに続く士卒たちを目にした鑑賞者は、義経が老翁と対面し道を問うという本場面に至るまでの物語をも想起することができたのではないだろうか。

以上、義経が〝黒駒〟に〝乗っている〟という二つの点にこだわって、絵相を分析してきた。『平家物語』や『源平盛衰記』といった〈一の谷合戦〉

を語るテキストのみの分析になったが、本屏風絵には、おそらく当時観念化されていたであろう「大夫黒」に「乗った」義経の姿が描かれている。そして、その絵相は、本場面の物語だけでなく、それ以前の物語（大将として鵯越に向かう）とそれ以後の物語（坂落）を想起させるものとしてあったと考えられる。本絵相の語りは、一場面のみを鑑賞者に伝えるだけでなく、義経を中心としたその前後の物語をも想起させるものとしてあるのではないだろうか。

六　坂落の語り方―〝稜線・巌・霞〟による語り

さて、本場面を読んだ鑑賞者の目線は、その後どのように動くだろうか。画面を見ると、老翁と弁慶の背後には、こんもりとした木々が描かれ、さらには霞で閉じられている（下図参照）。一方で、義経の後続を隠している山の稜線は左下に伸びている。つまり、鑑賞者の目線は、木々や霞によって山の稜線に注目させられ、そしてその稜線によって画面左下へと誘われる。すると、なだらかな山の稜線が終わるとともに、ごつごつとした巌が見え始め、霞が左上にゆるやかに上がっていくとともに、巌の縦の線が大きく伸び始める。そうして、その岩肌に合わせて目線を上下させていった先に、坂落直前の場面が描かれている。一旦、霞と山の稜線に従って目線を下方に向けていた鑑賞者は、坂落の場面がその目線の位置よりも上に描かれているために、まさに見上げるような感覚で坂落の場面を見ることになる。さらに、義経たちの姿が一旦消えていたことから、義経たちが突然現れたという感覚も抱くことだろう。坂落の場面の

右に描かれている霞も、落差や義経たちの登場を演出するものとして、効果的に描かれている。

このように老翁との対面以後は、義経達（人物）は描かれず、場面の場そのものの山や巌を鑑賞者が注目して見るように描かれている。もちろん、険しい山容によって、義経達の辿った鵯越の険難さは想像できる。しかし、それはそのような物語の展開を語るだけではなく、もしくはそれ以上に、坂落の場面を効果的に鑑賞者に読ませるための工夫として描かれているのではないだろうか。坂落へと誘う山の稜線・巌の縦線・霞の語りは、坂落を演出するための語りになっているのではないだろうか。では、そうだとすれば、どうしてそのような語りになっているのだろうか。

七　おわりに

以上、本稿では、物語場面の語られ方や場面分けしている霞、場

面の場〈山の稜線や巌〉に着目し、〈絵語り〉を読み解いてきた。本屏風絵は、『平家物語』や『源平盛衰記』などの物語を忠実に描くのではなく、おそらく当時観念化されていたであろう大夫黒に乗った義経を描き、また、後続も描くことによって、大将として坂落に向かう義経の姿を語り出している。そして、その後は、霞や山の稜線、巌の線によって、坂落の場面に至るまでを語り出している。このように見ると、画面①は義経や義経の坂落に拘って語られているように思われる。では、どうしてそのような語りになっているのだろうか。この問題については稿を改めて検討したい。

また、本稿では検討できなかったこともある。例えば、

・鑑賞者が知っている義経の物語はどのようなものなのか。

・〈義経〉はどのように観念化されていたのか、『平家物語』や『源平盛衰記』外からの分析。

・中世絵巻や合戦絵の語り口との交渉（義経の後続にいる士卒には談笑する者たちもいる。こうした姿を見ると、果たしてどれだけ物語に関わるものとして描かれているのか疑問も残る。例えば、中世絵巻には、ストーリーには直接関係しない図像を慣用句的に用いたり、空白を埋めるために図像を描いたりする手法が取られている。[*13]

前田氏論文では、「大坂夏の陣図屏風」からの図像の転用や近世的な武士や城の姿が指摘されており、本屏風絵は、合戦絵の語り口でもって一の谷合戦を語っていると考えられる）。

以上、課題も残るが、「源平合戦図屏風（一の谷合戦図）」の〈絵語り〉に関する覚書として一旦まとめておきたい。

〔付記〕「源平合戦図屏風（一の谷合戦図）」の掲載について兵庫県立歴史博物館、また、当館学芸員前田徹氏から格別のご高配をいただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げる。

注

＊1　古記録には、平家絵の存在を知らせる記事が複数あるが本稿では割愛する。ただし、『翰林五鳳集』（一六二三）所収の天隠（一四二二―一五〇〇）の画賛には、一の谷合戦図に関わるものがあるので指摘しておく。

・「一谷城圖」　萬騎下山源氏兵　平家運盡出堅城
　長江不洗英雄恨　日夜風濤戰鼓聲

・「熊谷招敦盛圖」　生年十六美男兒　身命碎珠廻馬時
　熊谷道心從此始　法然室内念阿彌

＊2　川本桂子「『平家物語』に取材した合戦屏風の諸相とその成立について」（一三八頁～一四五頁。『日本屏風絵集成第五巻　人物画　大和絵系人物』、株式会社講談社、一九七九年）。田沢裕賀「平家物語　一の谷・屋島合戦図屏風の諸相と展開」（二七〇頁～二七七頁。『秘蔵日本美術大観一　大英博物館Ⅰ』、株式会社講談社、一九九二年）。

＊3　『平家物語大事典』（五二二頁。東京書籍株式会社、二〇一〇年）

＊4　前田徹「いくさ場の描かれ方―兵庫県立歴史博物館本一の谷合戦図屏風」（兵庫県立歴史博物館紀要『塵界』第二十二号、二〇一一年三月）

＊5　註4前田論文

＊6　太田昌子・西山克・大西廣・小峯和明（司会）「《座談会》絵の読み方―イメージ・テクスト・メディア」（『文学』第十巻第五号、岩波書店、二〇〇九年）

＊7　弁慶は、薙刀を持っている。弁慶の「七つ道具」は「比較的はやくから常套表現」であったようで、ここではその一つのが描かれている（六四九頁。『歴史学辞典第3巻　かたちとしるし』、株式会社弘文堂、一九九五年）。なお、本屏風絵には、老翁のみが描かれているが、絵画テキスト諸本には①老翁と鷲尾三郎義久を一緒に描くもの、②鷲尾三郎義久のみを描くもの、③本屏風絵のように老翁のみを描くものの三種類の絵相がある。文字テキストで、本屏風絵のようにまずは老翁との対面を語るテキストは、『平家物語』と謡曲「二度掛」。『源平盛衰記』は鷲尾三郎義久のみの対面を語る。

＊8　本文は、『新定源平盛衰記』（新人物往来社、一九九一年）に拠った。

＊9　本屏風絵が制作された時代からはやや下るが、江戸時代の通俗軍記作者馬場信意の撰による義経の一代記『義経勲功記』（大阪府立中之島図書館石崎文庫蔵）には、『源平盛衰記』と同じような記事がある。

義経爰ニテ思慮シ玉ヒ。今マデ乗リ玉ヘル。大鹿毛ニ。佐藤三郎継信ヲ乗セ玉ヒ。我身ハ太夫黒ト云フ名馬ニ乗替玉フ。

＊10　泉万里「幸若舞曲「八島」とその絵画」（『大和文華』第一一三号、二〇〇五年八月）では、近世初期の幸若舞曲「八島」を絵画化したものに、義経が黒駒に乗っている図があるとの指摘がある。茨城県立歴史館所蔵狩野探幽筆『義経図』（牟礼高松図）（一六六三年前成立）では、黒駒にまたがる義経が描かれている。義経の観念化を考える上では、幸若舞曲「八島」などの嗣信の物語の広まりなども考えておく必要があるだろう。

＊11　カラー図録のみの確認なので断言は出来ないが、東京富士美術館本に描かれた義経の馬は黒駒に見える。もし黒駒であれば、本屏風絵の絵相は特徴的だと言えるだろう。なお、義経が騎乗したまま鷲尾三郎義久と対面するものに、『源平盛衰記絵巻』（一七世紀半）がある。こちらは『源平盛衰記絵巻』（青幻社、二〇〇八年）の白黒版のみでの確認となり、黒駒かは不明。また、本屏風絵と異なって義経の後続が描かれていない。

＊12　神戸市立博物館本「一の谷・屋島合戦図屏風」（狩野吉信筆、十七世紀）は、陣をとって対面する場面の前に、山道にて義経が騎乗したまま、後続を振り返っている姿が描かれており、『源平盛衰記』に近い。また、海の見える杜美術館蔵奈良絵本『源平盛衰記』（江戸時代前期）には、「鷲尾一谷案内者事」の前に、「清草射鹿並義経赴鵜越事」の場面が描かれ、山中を騎乗して進む義経一行が描かれている。

＊13　拙稿「〈絵語り〉論序説」（『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部』五五号、二〇〇七年三月、広島大学大学院教育学研究科。四七九頁～四八六頁。）にまとめて述べたものがある。

（広島大学附属福山中・高等学校）